

いずし食文化衰退に危機感

いずし文化を絶やすな!!



寿司研究家の日比野光敏氏

衰退する一方の「飯寿司文化」を守ろうと、当社(株)中井英策商店は、近く任意団体「いずし文化を守る会」(仮称)を立ち上げることに

『いずし文化を守る会』設立へ イベントや講演会、交流事業も計画

来年春に設立記念イベント開催へ

中井英策商店

この会は、かねてから当社が計画していたもので、ひと昔前までは、冬になると一般家庭でも作って楽しんでいた「飯寿司」が現
代では殆ど作られなくなっ
て来たことに加えて、市販
のいずしを購入する消費者
の年齢層も圧倒的に五十歳
代以上の中高年者が多く、
十代から三十代までの若者
世代では殆ど食されなくな
って来ていることから、
「このままでは十年後、二
十年後にはいずしを食べる
文化そのものが消滅の危機
に瀕することを懸念してき
たもので、「先達が苦勞し
て作り上げて来たいずしと
いう優れた発酵食品の文化
を守りたい」と願う当社及
川代表が呼びかけ人となつ
て、近く法人格を持たない
任意の団体として「いずし
文化を守る会」として会を
発足、会の顧問に我が国寿
司研究の第一人者で寿司研
究家の日比野光敏氏に打診
しているほか、一般消費者
で会の趣旨に賛同するサ
ポーターズクラブ会と当社
などの関連企業などの協賛
などで組織する計画だ。

具体的な活動としては、いずしに関しての講演会やイベント、会員同士の交流会なども計画、「この会を通じていずしにもっと親しんでもらうきっかけにした
い」(当社及川社長)と期待
を込めており、来年春の会
設立記念イベント開催を計
画している。

不定期刊

きんきん新聞

「きんきん新聞」第20号
2016年(平成28年)11月1日発行
発行:(株)中井英策商店
☎(0142)24-2934
メルアド:kinki@nakai-shop.com

秋の物産展終盤へ

ラストは今月18日からアクセスサッポロ



今年も元気に皆さんの地元にお邪魔しました・・・。
毎年恒例となった当社秋の物産展ツアーがいよいよ終盤を迎えてきた。
これは、毎年春と秋に全道、全国の百貨店やイベント会場などを回って当社製品「きんきいずし」などを試食販売する物産展回りで、今年も秋の物産展が一〇月上旬からスタート、きたキッチン旭川店を皮切りに札幌、苫小牧、青森などを回った。
秋の物産展ラストは、十一月十八日から三日間、札幌市厚別区のアクセスサッポロで行われる「北のアメ横」で、今年も主力のキンキいずしを始め、お買い得品を取り揃えて出店する予定になっている。

速報

当社がクラウド

ファンド着手へ

西胆振CF協議会採択決定

当社(株)中井英策商店は、広く一般消費者から出資者を募って、事業運営を行うネット上での出資ファンド「クラウドファンディング」を来月にも開始することが決定しました。これは、このファンドを運営する事業会社と当社の地元伊達市を中心とする西胆振地域の行政がタイアップして設立した「西胆振クラウドファンディング」運営事務局の採択を当社が受けたことから、正式に開始するもので、近く当社から正式にお客様にご案内をお送りする予定です。



あのイラストでお馴染みの
中井英策商店
社長の及川昌弘です

■私の横顔■ 趣味は音楽とひとり旅かな?

私は、皆様は大変お世話になっております中井英策商店三代目社長の及川昌弘と申します。
 「中井英策商店」なのに何故及川なの?って思われたかも知れませぬ。
 勤の良方はおぐ分かったと思いがすが、私の家内が先代社長中井英光(現会長)の娘なんです。
 そう言う「ああ嬌さんね」と良く言われるので、面倒なので「そうなんですお」って申します。
 昭和52年12月23日北海道釧路市生まれの現在48歳です。
 趣味は、良く言えば幅広く多趣味ですが、早い話「これも中途半端」です。音楽や読書、旅行や模型作り、長く読んでいるのは若い頃に夢見た「音楽」でしょうが、今でもストレス解消に、ギターやピアノなどを弾きながら誰もいなかった夜の会社の事務所で、大声で歌っています。とあなたが、一緒にセッションでもしたいですね。大好きなのはビートルズやオフコース、チューリップなど、小田和正さんは私の永遠の「カリスQ」です。今年のツアーは残念ながら行けなかったあ・・・。

野良猫達は知っていた



キンキいずし誕生秘話④

人に歴史あり・・・、当社の主力商品としておよそ四十年、お客様にご愛顧頂き続けている「キンキのいずし」。その、誕生から今までの歩みを振り返りながら、今一度、原点に帰ってその美味しさの秘密をお伝えしたいと思えます。

書き手は、そうです！中井英策商店三代目社長の及川昌弘です。今回は連載の4回目、きんきんのはじめの開発者は、実は・・・だったというお話です。

キンキいずしの開発者、実は飯寿司嫌いだった

いつまで経っても売れない「キンキのいずし」に、中井会長は冷静に振り返った「そうだ!!俺は元々、飯寿司は好きじゃなかったんだ。そんな男が作りたいが売れる訳がない。やはりこれは失敗だったのかもしれない」とさらに落ち込んだという。

しかし、それがその後、大きく運命を変えることになるのはその時は、気が付かなかった

材料を吟味して行く。

しかし、「結局は、オレ好みの味になるのさあ・・・」と苦笑いする。それがつまり「飯寿司の苦手な人でも食べられる飯寿司」になって行き、それが結果的には「老若男女に好まれる飯寿司」となり、今日がある。

中井会長とは、良く原料の議論をした思い出がある。そして、会長の素晴らしいところ

のである。

飯寿司は元々クセがある食品であり、好き嫌いがハッキリしている。その元々好きじゃない、嫌いな人間が開発した飯寿司。逆を言えば、飯寿司が苦手な人、好きじゃない人でも食べられる飯寿司の味へと自然と流れて行きたかったのである。

その後も、中井会長は「皆が美味しいと思ってももらえないし、何より自分自身が美味しいと思う飯寿司を作りたい」との変わらぬ信念を基に、発酵方法や時間、温度や湿度、使用する糀、野菜、米などなど、こだわり抜いた原

は、「よし!!行ってみるべ」と言って、面白い話や旨いもの、飯寿司作りに役立てそうな原材料の話があれば直ぐ飛んでいく。あの行動力は、八十二歳になった今でも変わらない。「ウチの飯寿司に合う米を探しに行くべ」と言う合図に誘われて、全道を米探しに歩いたことも思い出の一つだ。こんなこだわりも「美味い飯寿司」を作る原動力になっている。

話は戻って、世に出たものの「相変わらず売れないキンキのいずし」、百貨店の物産展に出店しても売れない。「朝から何時間経っても、売上はたったの千二百円。頭に来て、



満を持して発売した「キンキいずし」が...

当中井英光会長

られるようになり、お客さんが「あつ、これがきんきんのはじめだね」と言って振り向いてくれるようになった。売上もほんの少しずつだが、伸びて行った。(次号が最終回です)

百貨店の横に会ったパチンコ店に消えてしまったさあ」と会長は笑う。

そんな流れが変わったのが、当時北海道知事に若くして就任した横路孝弘知事が提唱した「一村一品運動」だった。「伊達市の一村一品を探せ」とばかりに、当社工場にやって来たのが、当時の伊達市役所で商工観光担当だった若き日の場重一さんだった。

彼は「伊達市の一村一品として中井さんのキンキのいずしを是非、推したい」と若者らしく熱く語りかけてきた。その熱意に中井会長も快諾、二人の「二人三脚」が始まった。中井会長は「売れない催事やイベントに本当に良く付き合ってくれた。有難かった」と振り返る。その二人の努力がやがて実を結び始める。

それまで見向きもされなかった札幌の百貨店での物産展で、テレビ局の取材で取り上げ